

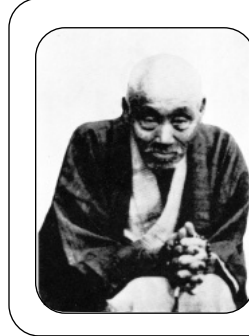
親鸞さま、なぜお念仏なの？ - 出会おう、語ろう、今ここで -

念仏生活を妙好人に学ぶ(2)

因幡の源左さんに

学んだこと

藤谷純子



源左さんは、十八歳の時に父親の死にであって、死によって終わる人生をどう生きたらいいのか、また真にたのむことのできる親様とは何なのかを求める生活が始まりました。

ある時、働き者の源左を見て「源左さん、まめでようござんすなあ」と声を掛けた人に、「時が来たら、ちよつとも待たれんだけなあ」と答えたという。生死の無常の理をよく知っていたのでした。

源左自身は八十九歳まで生きたけれども、六十七歳の時には母、六十八歳の時には妻、八十歳の時には四十九歳の竹蔵、八十一才の時には四十七歳の萬蔵と死別している。そしてこの二人の息子は心の病を患っているし、火事にも二度遭っている。それらを「なんにも（なにもかも）因縁だけなあ」と受け止めて生きていった源左さん。

与えられる人生を与えられるままに、善悪、不幸を言わずにそのことの深い意味を味わいつつ生きていったその原動力・依り処が御親様の大慈悲にあるのでしよう。源左の入信は、ある朝、自分ではとても持てなくなった刈草の束をデン（牛）の背に乗せた途端に、「ふいつと、分からせてもらったいな」と言っています。自分の力ではどうにもならない宿業の重荷から解放された軽さをとらうして、親様のお慈悲を身にわからせてもらったのでしよう。このことは、『大無量寿経』に、大乘の菩薩の生き方を「群生を荷負してこれを重担となす」（衆生の背負っている重荷を我が荷物として背負う）とか、「その生処に随うこと、心の所欲にあり」（衆生が苦勞して生きているところこそ、私が働きたいと願っている場所である）と説いてあることの体験・頷きだったでしよう。

「御文章に『たのむ、たのむ』と書いてあるが、あの『たのむ』がわからん」と問う同行に、源左は「こちがたのむのじやござんせえで。親さんが助けて下さるお慈悲に、すがるのでござんすがやあ。助けてやるつちゅう、お心をいただくので、ござんすわいな」と答えている。こちら（衆生）から如来への「たのむ」とか「信ずる」とか「おまかせ」では、本当の安心決定にはなりません。このことが昔も今も聞法求道の難関といえるでしよう。

源左さんは、「この源左が一番悪いで、仕合わせだがやあ」と言っている。前回の榎本栄一さんの詩にも私をつつむ大気も大慈悲も眼にはみえねどこの煩惱身でほのかにもわかりますとあったように、この身が墮ちれば墮ちるほど、阿弥陀仏のお慈悲の広大さに頭の下がる源左さんであったのでした。

親鸞聖人のご和讃に
罪障功德の体となる
「おりとみずのごとくにて
「おりおおきにみずおおし
さわりおおきに徳おおし
とあるとおりの源左さんの念仏生活でありました。その喜びからおのずと流れる常行大悲が、生きとし生けるもの（家族、盗っ人、動植物）への慈悲行の暮らしとなったのだと思われまます。

最後に一つ、源左同行の言葉を記して終わります。

ある人、源左の病氣を見舞って
えらいこたあ、ないかいなあ。
源左
えらいこたあ、ないけど、飯がうまんなあに、飯が三度三度うまい時に聞かしてもらわにや、もらえんわいなあ。
源左さんのお念仏の一生を学ばせていただきました。
南無阿弥陀仏
「ようこそ ようこそ」

釈尊の生涯(2)

降魔く成道

藤谷知道



釈尊の成道像、サーラナート国立、アフガニスタン

何を求めて出家されたのか

シヤカ族の王の子として生まれたゴータマ・シツダールタが出家したのは、自分の能力やその環境に不平不満があったからではありません。いかに満ち足りていようと、ついに「老・病・死」で終わる生であり、他の犠牲の上に成り立っている生である限り「苦」をまぬがれることはできぬことを知って、「苦」からの解脱を求めて出家したのでした。

禅定と苦行

出家したゴータマはマガダ国の首都ラージギル(王舎城)に行き、アーラーラ・カーラー

マから「無所有処」の禅定を学び、次に、ウツダカ・ラーマプッタから「非想非非想処」を学びましたが、解脱を得ることはできませんでした。

そこでゴータマは、マガダ国のガヤ近郊の苦行林に入り、極限までの苦行をしましたが、やはり苦からの解脱を得ることはできませんでした。

なぜでしょうか？ 私なりに

考えてみるに、禅定は心をコントロールすることで「煩惱」を鎮め、苦行は身体をコントロールすることで「煩惱」の芽を摘もうとします。しかし、いかに煩惱から自由になろうとも、存在そのものがかかえている「苦」からの解脱にはならなかったと思います。

魔にうち勝つ

ゴータマは苦行林から出て尼連禪河で身体を洗い、スジャータが捧げた乳粥をいただきました。力を得たゴータマはピツパラ樹の下に坐し、瞑想に入りました。ところが、瞑想に入ったゴータマに、時には命

を奪おうとする軍隊となり、時には快樂の世界に誘う美女となつて、悪魔が襲つてきたのでした。

しかし今度は、いかなる脅しや誘惑をもつてしても、悪魔はゴータマの瞑想を止めることができませんでした。ゴータマは魔との戦いに打ち勝つたのです。

どうして「魔」に打ち勝つ

ことができたのか？ それは「魔」の正体を見たからです。「魔」は、自分の外にいてのではなく、自分の中の欲望や恐れ、つまり煩惱の裏返しに相であり、真理に対する迷い、つまり無明が引き起こした妄想だったのです。この「降魔」こそ、ゴータマにおとずれた悟りの瞬間だったのでではないでしょうか。

ブツダ誕生

仏伝によれば、ピツパラ樹の下で瞑想を始めてから七日目の十二月八日、明けの明星の輝く時、ゴータマは悟りを開いて、**ブツダ**(覺者)となつ

たと伝えられています。ゴータマがその下で悟りを開いたピツパラ樹は、そのことにちなんで「菩提樹」と呼ばれ、悟りを開いたガヤの地は「ブツダ・ガヤ」と呼ばれるようになります。

梵天勸請

さて、菩提樹下の瞑想によって正覚をえたゴータマ・ブツダは、そのまま一週間、解脱の歓びを味わわれました。その後、一週間ごとに違う大樹の下に座を移して瞑想しながら、迷いの原因を尋ねていきました。ところが、迷いの原因が明らかになるにつれ、この法(ダンマ)は人々にはわかってもらえない、という不安がふくらんできたのでした。

その時です。梵天がブツダ

の前に現れて、人々に法を説いてくださるよう懇請したのでした。梵天とは、バラモン教で創造神として崇められているブラフマンのことです。ですから梵天勸請とは、天地をあげての願い、つまり生き

とし生ける者の願いをあらわしていると言えましょう。ブツダは梵天の勸請に「応えていま、われ、甘露の門をひらく。耳あるものは聞け、ふるき信を去れ。」

と宣言されたのでした。

初転法輪

梵天の勸請を受けたブツダは、自らが悟った法を人々へ説く旅に出ます。はじめに行つたのは、ブツダガヤから二百kmも離れたベナレス郊外のサルナートにあった鹿野苑でした。ここには、ブツダが苦行を共にした五人の仲間がいたのでした。ブツダはそこから何を説かれたのでしょうか？ 次回は、ブツダの覚られた**法(ダンマ)**について考えてみたいと思います。

第三回

「釈尊の生涯(3)」
転法輪く涅槃
藤谷知道
「浅原才市さん」
藤谷純子

4月14日午後1時半～